

2008

8

No. 35

Miyakojima City
Public Relations


広報

みやこ島

◆特集◆ 手仕事! 切・曲・接

～ たった独りとなったブリキ職人～



初夏の宮古を疾走 —『第1回ツール・ド・宮古島 2008』— 

7月5日・6日の両日、自転車ロードレース「ツール・ド・宮古島」が開催されました。このレースは、3月に行った宮古島のエコアイランド宣言を記念し、環境に優しい乗り物である自転車のレース大会として実施されたものです。初開催となった今回は、5日にはサイクリングの部、6日にはロードレースの部がそれぞれ行われました。

選手たちは、照りつける太陽と30度を超える気温に苦戦しながらも、初夏の澄み切った宮古の風景のなかレースに挑んでいました。

今月の主な内容

特集：手仕事! 切・曲・接 ……P2

宮古島のわだい ……P6

お知らせ(市営住宅空家入居者募集ほか) ……P8



手仕事！切・曲・接



亀濱英世さん。73歳。宮古島に唯一残っている「ブリキ屋」。26歳のころ独立。以後、50年近くブリキ屋を営んでいる。

くたった独りとなったブリキ職人

かつて、ブリキ製品は身近にありました。バケツやひしゃく、米びつをはじめ、雨どい、オモチャに至るまで、ブリキは生活になくてはならないものでした。ブリキを扱う人たちも、たくさんいました。しかし、今日では、そのほとんどがプラスチックに取って代わられ、若い世代はブリキという言葉聞いたことすらないかもしれません。

宮古島には、まだブリキ職人が居ます。亀濱英世さん、73歳。50年以上、ブリキを扱う仕事にたずさわってきた「手仕事」。

その技術は、いまだに衰えを知りません。

ブリキ屋の黄金期

そう広くない仕事場は、微かな金属の匂いが漂い、金属板に加工を施す工具がほどよく配置され、整頓の行き届いた様子から仕事に対する誠実さが伝わってきました。

15歳ころからブリキ屋に見習いとして始めたこの仕事。当手を振り返るともろいながら話を聞くことが出来ました。

戦後間もない昭和27年、宮古島の水道整備事業が開始されました。それは旧平良市の電気、水道、棧橋の三大整備事業の一つとして行われました。平良市内の30ヶ所に共同給水栓が設置され、管理責任者を選定し



時代を感じさせる機具。最盛期には毎日使用していたのでしょう。

て、給水券を発行し、時間給水法がとられていました。それまでは、井戸水や湧き水が頼りで、安定した飲料水の確保は大きな課題。井戸や湧き水の利用が難しい時は、雨水をタンクに溜めるなどして水の確保に努めていました。

そこで、活躍したのがブリキ屋さんです。当時の島民の多くは、赤瓦屋根やセメン瓦屋根の軒にブリキの雨どいを施し、タンクに雨水を溜めていたのです。最盛期には六軒ほどのブリキ屋さんが、雨どいの注文に追われて忙しい毎日を過ごしていました。

亀濱さんも26歳のころ独立し、その需要の一端を担っていたとのこと。その「当時は、朝6時から夜10時までで残業し寝る暇もなくよく働いたよ。昔は儲かった。働いた分は酒を飲んでなんにも残っていないけど」と、笑いながらその盛況ぶりを語ってくれました。

いろいろな注文

一枚の鉄板は、作り手に委ねられ変幻自在に形を成していきます。そこには、職人技が随所に反映され、その匠の手から産みだされる製品は、使い手の側に立ちながら道具の用途を追求し、使いやすさに重点を置く



作業中の亀濱さん。ただの金属板が瞬く間に道具へ変わっていきます。



亀濱さんの作った道具。釣りのルアーやお菓子の金型など。

究極のオーダーメイドとなります。

「これまで、どんな物を作ってきましたか」と聞くと、「30代の頃は、ステンレス流し台の注文が多かったね」との答え。今では、流し台と言えば、システムキッチンがあたりまえですが、昔は流し台と言えば、ブリキ屋さんの十八番だったそうです。「それから琉球菓子の金型、カマボコの金型などもよく作りました」と、自作の金型を見せてもらいましたが、ここにも匠の技が光ります。ブリキ加工は、もっぱら半田ごてを用いた半田付けが主流です。しかし、熱が加わるものには半田が溶けて使えないため、菓子の金型は鉄板の両フチを曲げ、びつたりと噛み合わせたポンチの2点止めで仕上げてありました。

素人目で見ても、すき間一つ無い見事な出来映えでした。

また、看板屋さんからの注文で宣伝用の「立体文字」を作ったり、バスやタクシー、トラックのラジエーターの水漏れも半田付けで修理したり…。意外なところで本領発揮の幅広い技術に驚きました。

銅板、亜鉛板、真ちゅう板、ステンレス板、ブリキ板、金属板一枚に命を吹き込みさまざまな製品を作ってきた亀濱さん。

「図面さえあれば何でも作ってきた。謙虚ながらも自信に満ちた表情は、これまでの経験と培った技術が醸し出すもの…。」

年金アラカルト

市民生活課 ☎ 72-3751(内線 160)

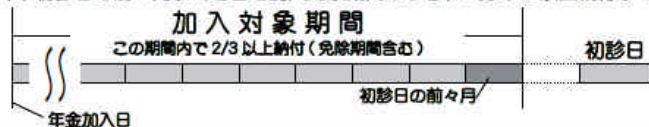
障害基礎年金 … 国民年金に加入中に病気やケガで障害が残ったときに受ける年金

対象は、国民年金に加入中(もしくは60歳以上65歳未満で日本在住)で、初診日のある病気やケガで政令に定める1級または2級の障害状態になったとき、下記の要件を満たしている方です。

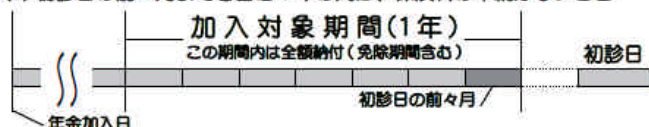
◇障害年金が受けられる要件 … 下記①と②を両方満たした場合に受けられます

要件① 保険料の納付 … どちらかに該当してオーケー

(1) 初診日の前々月までを含む加入対象期間のうち、3分の2以上納付していること(※免除期間含む)



(2) 初診日の前々月までを含む1年の間に、保険料の未納がないこと



要件② 障害の等級 … どちらかに該当してオーケー

- (1) 障害認定日に法令の定める1級または2級の障害になった
- (2) 障害認定日に該当せず65歳の前日までに該当するようになった
■ 20歳前に初診日がある場合、要件②のみを満たせば受給できます(所得制限有)

初診日とは、障害の原因となった病気やケガで初めて医師の診察を受けた日のこと。
障害認定日は、病気やケガで初めて医師の診察を受けてから1年6ヶ月を経過した日。または1年6ヶ月以内に症状が固定した日のことだよ!



◇年金額 … 1級障害のとき990,100円、2級障害のとき792,100円

障害基礎年金の受給者によって生計を維持されている子(18歳に到達する年度末の子、1・2級の障害のある20歳未満の子)があるときは加算があります。加算額は、1人または2人の場合、1人につき227,900円ずつ、3人目以降は1人につき75,900円になります。

◇特別障害給付金 … 国民年金に任意加入していなかった方への福祉的措置

- 対象 平成3年3月以前に国民年金の任意加入対象だった学生(定時制、夜間部、通信を除く)昭和61年3月以前に国民年金加入対象だった、厚生年金・共済年金加入者の配偶者
- 金額(月額) 1級障害で50,000円、2級障害で40,000円

「漂着物アートコンクール2008」
開催 & 作品募集!

日時: 8月17日(日)~23日(土)
場所: 宮古島漁業協同組合2階

◆作品も募集しています
期間: 8月11日(月)~16日(土)
内容: 漂着物を使った作品
申込: 規定の用紙に氏名・連絡先・作品名を記入し、作品とともに事務局へ持参
詳しくは 同コンクール開催事務局 72-2029

税 宮古島市納税課 ☎ 73-5229

休日納税相談を実施します

納税課では、普段お仕事などの都合により窓口へ来られない方の為に下記の日程で納税相談を行います。お気軽にご利用下さい。

- 期 日: 8月17日(日)
- 時 間: 9:00~16:30
- 場 所: 平良庁舎1階 納税課

時代の移り変わり



亀濱さんの工具(上)やお手製の定規(下)。なじんだものが一番使いやすいとのこと。

「後継者は居ないんですか?」と尋ねると、「この頃は、百円ショップに行けば何でも安く手に入るし、ブリキ屋の仕事は、めっきり少なくなってきた。もう、自分で終わりがあ」と少し寂しげに語る亀濱さん。戦後の高度成長期を経て、沖縄は念願の本土復帰を果たしました。時代の変化に伴い日用品のブリキ製品は姿を消し、今、私たちはプラスチック製品に囲まれて生活しています。プラスチックは、加工しやすく大量生産され消費の拡大の一翼を担った素晴らしい素材です。しかしその影で、ブリキ製品はだんだん需要を失っていききました。かつて、宮古島に六軒

仕事への思い

「今は、機械化が進み色々な物が大量生産されているけど、自分はこの手で、板(鉄板)を切って、曲げて、接くやり方しかできない。今は材料とかが高いから、これまでの価格で製品作りができなくて、お客さんに

なるほど… エコ製品!

今年3月、宮古島市はエコアイランド宣言を行いました。それからさかのぼること数年前、中学生だった亀濱さんのお孫さんが、おじいちゃんの技を使い、スチール製の空き缶を利用した筆箱を作ったところ、学校で大きな評判となったそうです。空き缶は上下を切り落とし広げると一枚の金属板になり、いろいろなものが作れます。ブリキ加工のテクニクとアイデア次第で意外な原素材となるのです。空き缶は捨てればただのゴミですが、職人が作るものには、手のぬくもりがあります。職人が作るものには、伝統工芸品にまで高められた宮古上布のように、技に裏打ちされた確かな形があります。匠にまでなるには時間と忍耐が求められる、故に後継者の確保が難しくなるのでしょう。ただ、時代を超えて残さなければならぬ技術があるように思いました。

負担をかけるのが申し訳ない。けれど、注文があればちゃんと作る! その意気込みは変わることはないようです。「この仕事は好きですか?」と聞いてみました。「若い頃からやってきた仕事だからねえ、できれば、一生つづけていたいねえ」芸は身を助けるじゃないけど、この技術があつたからこそ今の自分がある。自分の好きなことをしてきたので幸せものだよ。見習いを始めた頃は少し抵抗があつたようですが、お客様から感謝される仕事をつづけてきた仕事への誇りのようなものを感じました。

亀濱さんは、空き缶を利用した作品を色々考えているようです。ひるがえして考えてみるとブリキ加工の技術は、今の時代にとっても有効な技術ではないかとすら思えてきます。繰り返して使う、壊れたら修理して長く使い込む環境にやさしいライフスタイル。今年、エコアイランド宣言をした宮古島市にピッタリではないでしょうか?

地域住民で公園清掃!

下地地区地域づくり協議会では、去った6月29日に下地地区上地の池原公園の清掃活動を行いました。この清掃業務は宮古島市から下地地区地域づくり協議会が委託を受けて実施するもので、地域の住民が自ら利用する公園を清掃管理することにより、地域の美化活動を促進するねらいがあります。この日の清掃には、下地地区の小学生150名、大人50名、合計200名が参加しての清掃となりました。この清掃委託業務は年間6回を予定しており、同協議会では、これからも地域の小中学生のみなさんの参加を呼びかけ美化活動に力を入れていきたいと話しています。



小中学生の活躍がたのもしい!

みんなで踊ろー! 夏まつり!

7月5日(土)に上野保育所夏まつりが開催されました。今回は、上野幼稚園との合同の夏まつりとなり、たくさんの方で賑わいました。子どもたちはお父さん、お母さん、おじいおばあさんと一緒に踊り、その笑顔は普段にもまして輝いていました。

また、創作舞踊「久松五勇士」を職員たちが踊るほか、幼稚園児による手話が披露され、親子のふれあいや地域との交流を深め合い、楽しいひとときを過ごしました。



子ども博物館6年生コース開講式 地球上の水!何パーセントが利用できる?

宮古島市総合博物館では、6月22日「子ども博物館6年生コース」の開講式が行われました。博物館の教育普及活動の一環として、開講した子ども博物館は、「宮古島の水環境と生き物」をテーマに宮古島の環境に対する認識を深める目的で、今年度4回の講座を予定しています。

開講式では、講師に藤田富久氏(琉球大学大学教育センター)を迎え、いつものクラスとは違い、少し緊張ぎみの子どもたちの気持ちをゲームでゆるめながら進められました。

大きな地球儀のボールを使い陸地と海の割合を確認するなどし地球が水の惑星であること、その中で、自分たちが使える水がいかに少ないかを改めて学びました。

講座の予定

- 8/17 : 「マグスクガの生き物観察会」
- 10/26 : 「カニの解剖・魚の観察」
- 1/18 : 「宮古の環境を守るためにできること」

総合博物館第7回企画展「宮古の宝・サンゴ礁 ~サンゴってなに?」

7月22日~8月31日まで開催中!

※夏休みは小中高校生の入館は無料です。ぜひお越し下さい。



“見上げてごらん”
ちよつと上を・・・!

「お父さんの子ども部屋」

市内大型書店近くの飲食店に隣接する住宅地にあつては珍しい天体観測用のドームが、個人宅の屋上に鎮座しています。「家を建てるときは、周囲のほとんどが原野だったんですけど・・・。」と話すご家のご主人。

はじめは、子供部屋として造つたが、趣味の天体観測がこうじて、いつのまにか自分が独占しまった。子供には、「お父さんの子ども部屋」とからかわれていますよと苦笑する。「実は、宮古の上空は気流が安定し空気のゆらぎが少なく惑星観測に向いているんですよ・・・」と、全国の天文マニアの中では周知のことらしい。

話によると、全国のアマチュア天文メンバー8名が協力して宮古島天文観測所なるものを結成し、直径50cmの高性能巨大望遠鏡を島の某所に設置してしまつたと言つてから半端ではありません。趣味の領域を越えた「使命」のようなものを感じました。

星の観測に興味を持ったきっかけを尋ねると、小学校の頃に父親が購入してくれた天体望遠鏡が宇宙の扉を開ききっかけになつたと語りました。主に惑星を観測しているとの事です。「星々を観ていると心が解き放たれ、できることなら50億年ぐらゐ生きていて、宇宙の成り立ちを観つづけていたい」そんな、壮大な思いを語るご主人の目に少年の心があつました。私たちは、まだ、宇宙のはじまりを確認できていません。ただ、私たちが宇宙の一部です。放たれた一筋の光は、あまなく広がり命の源を創り続けています。

すぐそこにある無限の営みを体感できる環境がここ宮古島にあります。一度、ゆっくり見上げてごらん ちよつと上を・・・!



文化庁事業紹介

担当部署: 教育委員会文化振興課

「伝統文化子ども教室」

伝統文化子ども教室とは、伝統文化を子どもたちに体験、修得させ継承、発展させる事を目的として、文化庁が(財)伝統文化活性化国民協会に委嘱、実施している事業です。

今回は、「下地太鼓子ども教室」を紹介いたします。この教室は、下地子ども育成協議会が開催するもので、下地地区を中心とする子どもたちにエイサーで使用する大太鼓の演奏を修得させ地域におけるイベントや行事などに参加することによって、地域への関心を高めながら地域との関わり合う事の重要性を啓蒙していくことを目標としています。

子ども教室を開催してから今年度で3回目になり、19年度は、地域の事業、市のイベントに積極的に参加するなど伝統文化への意識も深まり予想を超える子どもたちの成長には目を見張るものがあるとのこと。

事務局としては、これまでの2年間は太鼓に触れる事に重点を置いてきたが、今回から演奏技術の向上を目標にしたいと話し、子どもたちがクラブ活動や塾との調整を行いながら頑張ってきたこれまでの成果を評価しながら、さらなる発展に期待をしています。

7月5日に今年度の開講式及び太鼓の初打ちが行われ、我が子を見守る母親のような事務局の方たちの思いが印象的でした。



新コーナー「一筆物語」がスタート! 投稿者募集中です。

夏の浜辺、子供たちは宝探しに夢中、親たちは子供探しに必死! (PN, 青空S.A.N 36歳)

いくつになっても、人生やり直せるよ。挫折じゃなくて、方向転換! (PN, 一筆姫)